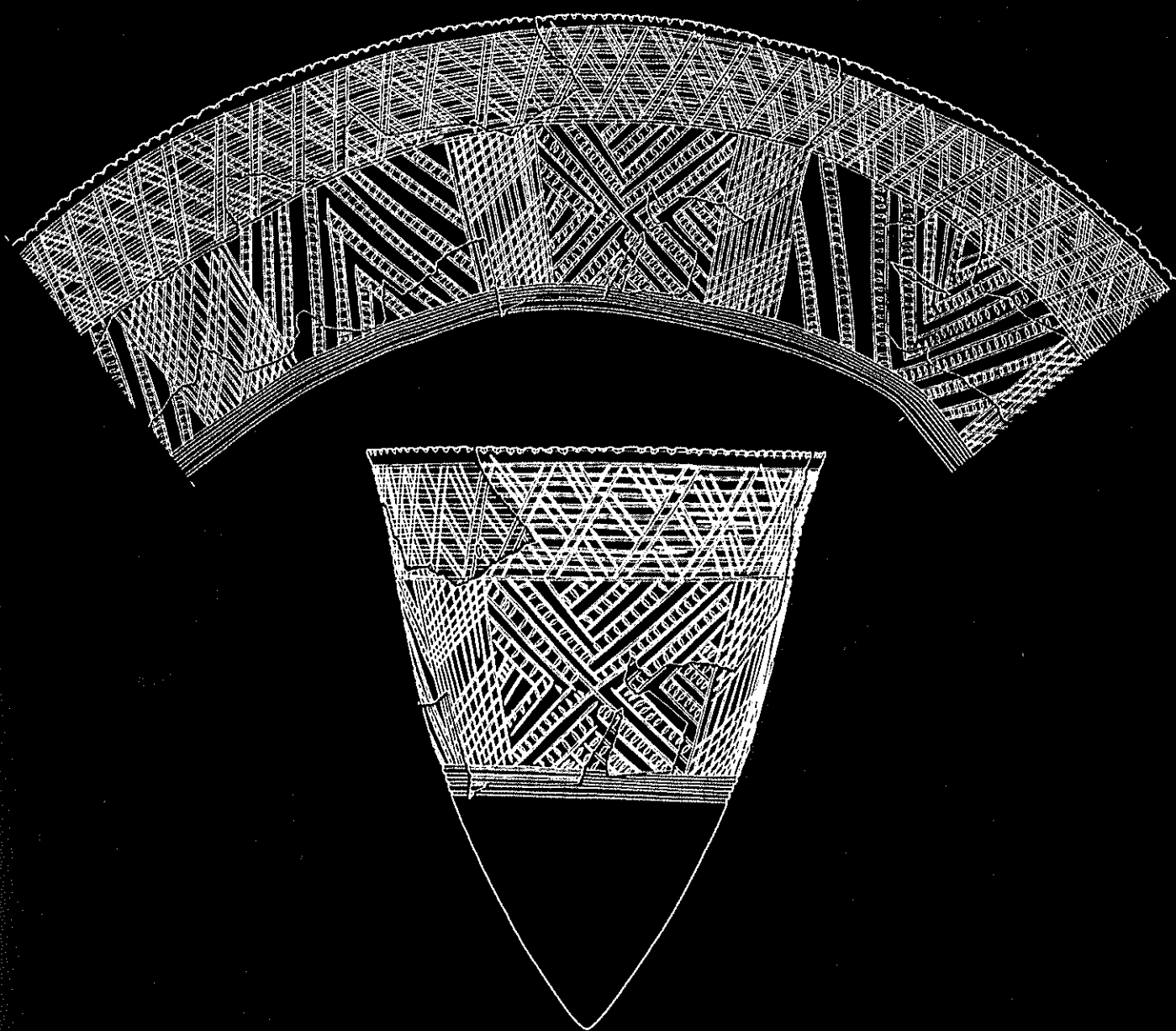


盛岡市遺跡の学び館 第24回企画展

北上川上流域の縄文時代早期土器

－ 幾何学文様の系譜 －



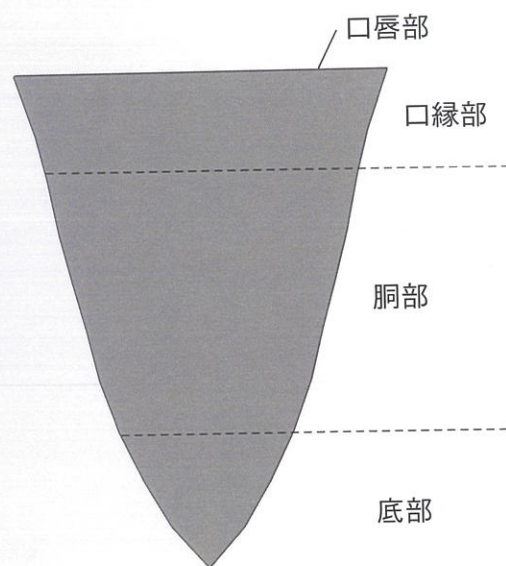
2026. 10

盛岡市遺跡の学び館

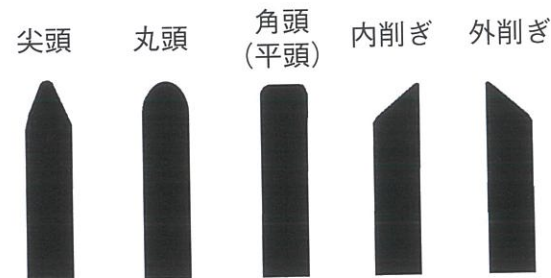
〈土器の名称について〉

- (1) 土器の部位は上から「口唇部」・「口縁部」・「胴部（体部）」・「底部」の名称を用いた。
- (2) 口唇部は断面形状から「尖頭」・「丸頭」・「角頭（平頭）」・「内削ぎ」・「外削ぎ」の名称を用いた。
- (3) 口縁部は形状から「平縁」・「波状」・「小波状」・「背鰭状突起」の名称を用いた。
- (4) 土器文様は「縄文」・「捺糸文」・「無文」・「押型文」・「沈線文」・「刺突文」・「貝殻文」・「条痕文」・「微隆起線文」の名称を用いた。
- (5) 本文中において無文土器や押型文土器の厚さ（器壁）を「薄手」・「厚手」と表現しているものがあるが、概ね「薄手」－6mm前後・「厚手」－8mm以上とした。

砲弾状・円錐状の尖底深鉢形土器

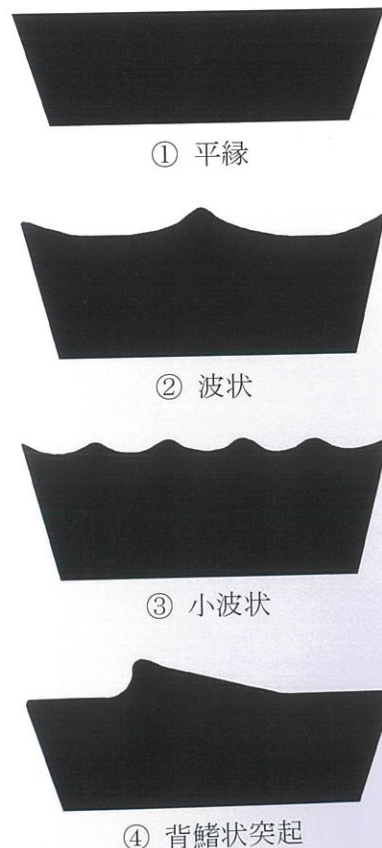


口唇部断面形状模式図



口唇部の断面形状は同一個体でも形状が異なる場合があり、意図的に整形したものと思われる箇所を抽出して模式図化した。

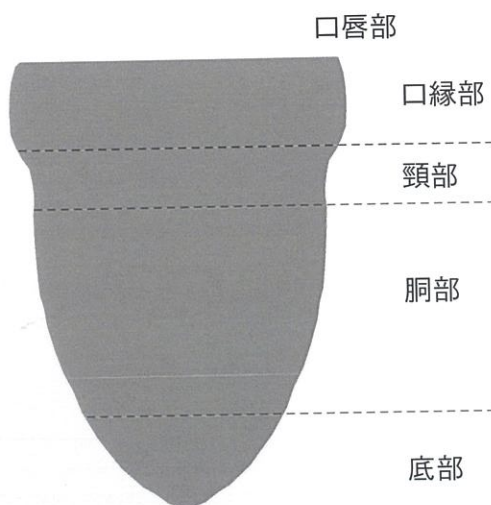
口縁部形状模式図



口縁部形状については文献により、表現の名称が異なるため「縄文土器の知識Ⅰ－草創・早・前期」（1986 麻生優・白石浩之）を参考にした。

本図録では平縁・波状・小波状・背鰭状突起としたが、説明の際は、口縁部の「波」など突出した頂部を「突起」と表記した。④については、左右不均整な突起・山形突起・波状突起などの説明があるが、特殊な形状であり他の突起と区別するため、本図録では便宜的に「背鰭状突起」と表記した。

頸部に括れのある尖底深鉢形土器



土器の器面調整

器面調整について、縄文時代早期土器の器面は丁寧に調整されており、沈線文などの文様は器面調整後に施されている。本図録では最も多く観察された主な調整を「ナデ」①～④・「ミガキ」⑤・「条痕」⑥・⑦と表した。施文具や調整段階の違いで調整痕が異なるが、手法が同じと思われた場合は詳細を省いた。

ナデ・ミガキ

ナデの場合、明確な指の痕跡が認められた場合は「ユビナデ」、皮など道具を用いたものと思われた場合は全て「ナデ」とした。ナデ調整は器面調整で最も多用されている調整手法で、②は水で湿らせた皮で器面を撫でたもの、③は乾燥した器面を乾燥した皮で撫でたもの、④はやや乾燥した器面を乾燥した皮で撫でたものである。①ユビナデと②ナデの違いは、ユビナデが均一な細かな条線が観察され、指頭の浅い部分が器面には高く表出される。ナデは皮などの軟らかい部分が撫でた際に動き、条線が波打つように乱れる。

乾燥した器面に乾燥した皮で強く撫でると⑤のミガキのような光沢が生じる。⑤のミガキは施文具の大きさによって違いはあるが、丸い施文具（写真は竹）の場合は円の側面のみが機能面となるためミガキ痕は狭く、ミガキの単位が明瞭に表れる。しかし乾燥した皮を使用したナデは幅広く、単位が不明瞭なものが多い。僅かに土器に含まれている砂粒の動きを観察することで単位や動いた方向は推察できる。

条痕文

⑥・⑦は「条痕文」と呼ばれるものだが、本図録では器面調整痕として扱い、「条痕」と表した。条痕には2種あり、条の幅・深さが均一でない条痕⑥、幅・深さが均一な条痕⑦である。⑦は貝殻の縁を引きずるもので、貝殻文土器群全般に認められる。⑥は早期後葉の土器に多く見られる条痕で、写真の施文具はヨモギの太い茎を半截して、半截面を器面に引きずらせたものである。



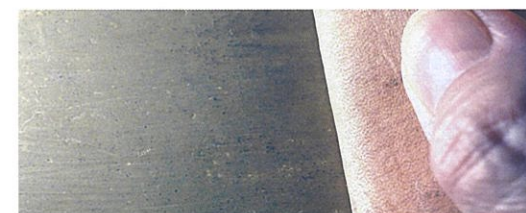
① ユビナデ（指）



② ナデ（皮）



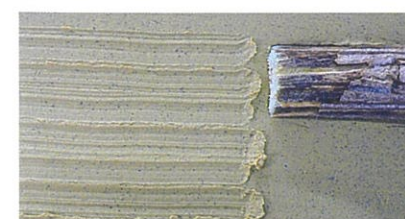
③ ナデ（器面乾燥 皮）



④ ナデ（器面半乾燥 皮）



⑤ ミガキ（器面半乾燥）



⑥ 条痕（植物）



⑦ 条痕（貝殻）



⑥・⑦の比較
（上段 植物、下段 貝殻）

※ 写真ではヨモギを使用したかったが、半截した木材でも同様の条痕は表出できる。材の種類によって条痕に違いが生じることが考えられる。

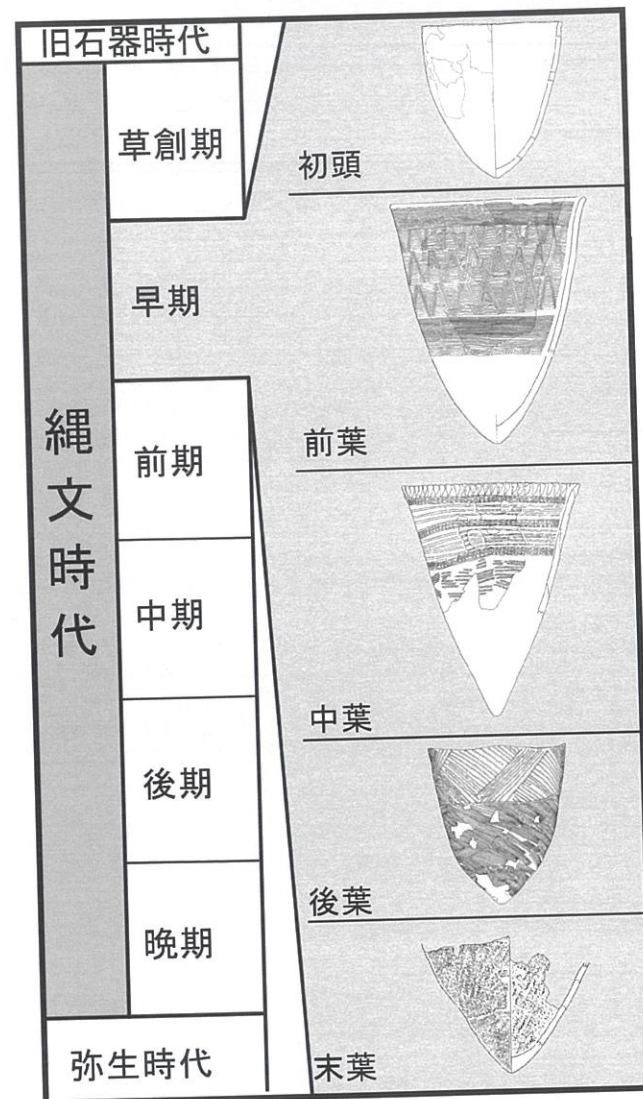
I 盛岡における縄文土器のはじまり

1 土器に記された文化

温暖化が進み、氷河が溶けて世界的に海水面が上昇した頃、それまでエゾマツ・カラマツなど針葉樹で覆われていた日本列島がブナ・コナラ・クリといった落葉広葉樹の植生に移り変わる。それまで食糧となる動物を求めて、移動性の高い生活をしていた人々は、身近にあり、安定して確保できる植物を食糧とするようになる。道具にも変化が現れ、縄文時代以前は刺す・切るを主な用途とした石器であったことに対し、縄文時代になると小動物を射ることに効力を発揮した石鏃、石皿や敲石と呼ばれる敲く・擦るなど植物加工を思わせる石器が増加していく。土器は、自然界に存在する数少ない原材料を余すことなく加工できる重要な器具であった。煮沸・貯蔵・盛り付けといった現代に通じる用途は、長く自然に依存した縄文時代に確立したものと思われる。自然界の物質を食糧に変える土器は縄文人にとって特別な器であったことだろう。土器に施される装飾は、過酷な自然との共生から生まれた感謝や畏怖を表現したのかもしれない。縄文時代早期は、縄文時代以前の生活が色濃い草創期から脱却して定住化が進み、地域に根付いた地方色豊かな文化が各地でみられるようになる。しかし、地方差を示すものは遺跡から発見される土器や石器など、当時の文物の中では僅かなものから推察しなければならない。土器は、縄文人の意思や伝統が意匠として表現された数少ない文物であり、当時の文化や地域間の交流を知るためには、情報が凝縮された土器を介して知るべきである。

2 土器の時期区分

縄文土器は大きく、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期に6区分されている。縄文土器を6時期に大別したのは縄文時代研究の基礎を築いた山内清男博士(明治35(1902)～昭和45(1970)年)で、当初は早期から晩期までの5区分で大別していたが、古い土器が各地から発見されるようになり、早期を草創期・早期の二つに区分する。区分にあたり、山内博士は押型文土器に注目しており、日本列島における縄文土器の拡がりや画期を示す例として重要な土器であることを示唆した。



第2図 縄文時代早期土器の大別

盛岡周辺では、押型文土器以前は薄く、底部は平底や丸底を呈する文様の無い土器が流行していた。後の尖底土器を特徴とした早期土器よりも草創期の爪形文土器群に近い土器であった。その後、特殊な施文手法である押型文が出現し、器形も尖底土器と呼ばれる砲弾を逆さにしたような土器が流行する。この尖底土器が製作され続けた期間が早期といわれる時期で、約4千年にも及ぶとされる。

早期は長い期間であったが土器文様には着実な変化があり、時代の流れを読み取ることができる情報が込められている。本企画展では展示資料をとおして土器の変化を見ていただきたい。

3 縄文時代草創期の土器

縄文時代最初の土器群である草創期土器は、青森県大平山元I遺跡の無文土器を最古に、隆線文土器を主体とする段階→爪形文土器を主体とする段階→多縄文(押圧縄文・回転縄文)を主体とする段階→回転縄文や撚糸文を主体とする段階の順で推移するといわれている。

盛岡市内では、大新町遺跡・大館町遺跡・安倍館遺跡・田ノ沢遺跡の4遺跡で当時の土器や石器などの遺物が確認されている。後続する早期遺跡数は約85遺跡確認されていることを思うと極めて少ない遺跡数であることがわかる。全国的な流れでは、爪形文土器群から多縄文土器群に移り変わる。岩手県では北上市齊羽場館跡、花巻市アバクチ洞穴遺跡、軽米町馬場野II遺跡から多縄文土器と思われる資料が僅かに出土。青森県八戸市櫛引遺跡では多量の多縄文土器が出土していることから、岩手県を含む東北地方北部でも爪形文土器群～多縄文土器群への変遷があるのだろう。しかし、草創期の多縄文土器群から早期の押型文土器群への変遷は現時点でも判然としない。早期前葉の押型文土器群より前に無文土器群が東北地方に広がっていたが、無文土器群に多縄文の面影は少なく、共通点としては底部が平底を呈することだろうか。「多縄文」の由来である縄文原体を回転、押し付けた多彩な文様も見られない。一方で関東地方では多縄文土器群の後継として撚糸文土器が流行し、後半になると押型文も出現し、終末期には器壁が厚い無文土器が数多く作られる。その土器変遷は出現→発展→一定着→簡素化の流れを繰り返しており、東北地方の土器も無関係ではないだろう。他地域との比較は、縄文文化の成り立ちや拡がりを知る上で重要なことなのである。

草創期と早期の違いは土器を見ても感じられる。煮炊きに必要な土器であるが、草創期から早期初頭の土器は、口径20cm前後・高さ20～30cm程の土器であったが、大新町遺跡出土の押型文土器や沈線文土器になると口径40cm以上×高さ50cm以上の土器が製作されるようになる。これは、草創期から早期の間に大量煮沸を必要とする生活・生産活動が始まったことを示唆し、後述する敲石の増加と無縁ではないだろう。



第3図 爪形文土器(草創期 大新町遺跡出土 器高16.7cm・口径19.3cm 当館蔵)
※平成12(2000)年 罹災

大新町遺跡から出土した爪形文土器は、口径が大きい碗のような器形で底部は僅かに尖る丸底に近い尖底を呈する。土器の厚さが6mm前後と薄く、土器には多量の雲母を含む。爪形文は横に並列させるもの、ハの字・くの状に爪形の方向を変えて施すものなど装飾を意識したかのような施文がみられる。基本的に横方向に爪形文を連続して施すものが多い。爪形文は人の爪だけでなく、動物の骨や木など断面形状が円形もしくは半円形に截断した道具を用いて施文したと思われる。



第4図 爪形文土器
(草創期 大新町遺跡 当館蔵)



第5図 爪形文土器に伴う石器
(草創期 大新町遺跡 当館蔵)

Ⅱ 縄文時代早期前葉の土器 -押型文土器-

1 押型文土器の流行

押型文は早期前葉頃、九州から東北地方や北海道にまで広がった特徴的な文様である。押型文とは円柱状の棒にV・X・格子目などの彫刻を施し、その棒を土器の器面に回転させて彫刻の凹凸（文様）を土器表面に転写させた特殊な文様で、山内博士は「…関東から九州まで回転押型文が偶然に分布したとは思えない。…この種の手法が驚くべき一致を持って再三出現すると云うのも如何かと思う。恐らく系統を同うしたものだろう。…」と説いたように押型文土器が、縄文文化が一つの系統にある文化であることを示す重要な土器であることを示唆していた（1935 山内）。後に博士により回転押型文土器以前を草創期、以後を早期と区分する。

押型文土器の全国的な分布は、縄文時代が地域を越えた活発なモノや文化が行き交う環境であったことを物語る手法・文様といえる。

東北地方では、V字や菱形の文様を特徴とした日計式といわれる押型文土器が流行する。

日計式は東北地方全域に色濃く分布し、周辺の北関東や北海道渡島半島でも発見されている。日計式は原体の種類が少なく、V字状・菱形の押型文を主体に、同じ回転施文の縄文も使用されている。口縁部など文様の区切りとなる部分に横方

向の沈線（横位平行沈線）を引くなど器面を文様で飾る傾向が見え隠れする。器形は砲弾を逆にしたような形状で、40cm以上の器高を持つ土器は少ない。土器を作る粘土には混和材と思われる繊維を混ぜるなど特徴的な土器である。

日計式押型文は、原体種類を増やしながら関東地方で分布を拡大した三戸式といわれる沈線文土器の影響を受け入れる。盛岡市大新町遺跡や滝沢市風林遺跡から出土した土器は代表例であり、発見者の武田良夫氏により「大新式」と名付けられ、日計式押型文土器に後続する土器群に位置付けられた。その後、大新式は千葉大学名誉教授岡本東三氏によって大新町a・b式に細分され、大新町a式は押型文と沈線文が併用される段階。大新町b式は沈線文を主体とする段階に分けられた。

この流れを整理すると、①V字状など押型文を主体とする段階（日計式）→②V字内に横線など条線を充填させる押型文と、押型文と同様の文様効果を持つ幾何学的な文様を沈線で描く段階（大新町a式）→③沈線文が主体的な文様となる段階（大新町b式）の変遷過程がうかがわれる。盛岡周辺部では、押型文は③の段階でほぼ消失するが、報告例は少ないものの東北南部では押型文が施される例も散見される。

第10図は武田良夫氏によって復元製作された押型文原体模型である。直径1cm×長さ4cm前後の原体で、実際に出土した土器を参考に作成されたものである。武田氏によると④の平行線状文について「マッチ棒のような細い角棒を転がした文様」、「貝殻の縁を引いた文様（貝殻条痕）」、「浅い沈線文」ではないかと意見が述べられたそうである。しかし、武田氏は線の下に引いた際に残る擦痕（光沢）がないことから「回転押型文」の一種だと確信した。その研究成果は昭和44（1969）年に発表され、現在ではバリエーション豊かな押型文文様の一つとして知られている。



第10図 武田良夫氏作成 押型文原体模型 当館蔵

割付基本形		押型文の主な文様						
		日計式	大新町a式（日計式後半期）					
V字状文		 重層V字状文	 横線V字状文1	 横線V字状文2	 横線V字状文3	 横線V字状文4	日計式押型文は横線の入らない押型文が主体的で、大新町式は横線の入る押型文が主体的である。 日計式押型文と後続する大新町式押型文は基本的に横方向に原体を回転押捺させる。中部地方では、押型文前半期は縦方向、後半期に横方向に回転押捺させる傾向がある。	
			 横線V字状文5	 複合V字状文	 変形V字状文			
X字状文		 重層X字状文	 横線X字状文	 重層X字状文1	X字状文と菱形文は似ているが、連続する菱形の連結部分が交差するかしないかで名称を異にしている。盛岡で確認されている「菱形」を呈する押型文は菱形文が大多数で、X字状を呈する押型文は大新町遺跡・風林遺跡のみで確認されている。			
y字状文		 重層y字状文1	 横線y字状文	 重層y字状文2	日計式押型文の多くは模式図にある「割付基本形」に、平行する線を2～3条加えた文様（重層）が主体的である。しかし、大新町式になるとV・X字状・y字状・菱形状など直線を組み合わせた原体に横線・斜線を足し、複雑な文様を生み出すようになる。			
菱形文		 重層菱形文	 横線菱形文1	 横線菱形文2	斜格子目文は日計式・大新町式の両型式で認められるが、斜長格子目文は大新町a式の頃に多用される傾向がある。			
格子目文		 斜格子目文	 斜長格子目文	縦割文は大新町a式段階に出現する。他地域においても日計式後半になると縦割文が散見される。同様の文様は中部地方や東海地方でもみられ、偶発的に出現したのか、全国的な流行なのか明確ではない。				
縦割文			 横線縦割文1	 横線縦割文2	 横線縦割文3	 格子斜線縦割文1	 格子斜線縦割文2	 格子斜線縦割文3
平行線状文		 横位平行線状文	 縦位平行線状文	 斜位平行線状文	横位平行線状文は日計式・大新町式の両型式で認められるが、後出の大新町式で多用される。日計式段階では押型文の上から横方向の平行沈線を数条引くものが多いが、新しくなると平行線状文を施す土器が現れる。大新町式では、口縁部に平行線状文を施し、上から沈線による山形文を描く土器もある。			

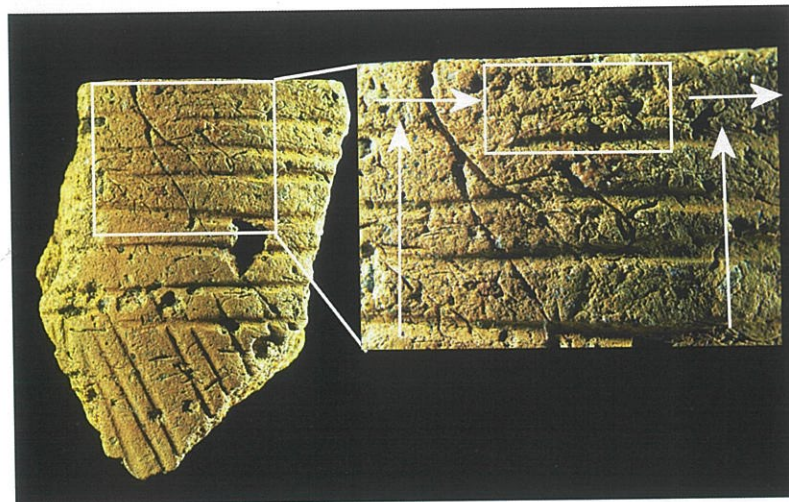
第11図 押型文模式図

Ⅲ 沈線文の発展 - 描線技法の確立 -

1 押型文土器から沈線文土器へ

大新町遺跡や風林遺跡では横位平行沈線または横位平行線状文などの押型文を施文したのち、その文様上に沈線による幾何学文を描き、横線V字状文など、押型文と同様の文様効果を表現した土器がある。遺跡数が少ないため定かではないが、押型文に沈線による幾何学文を加える手法は押型文文化から沈線文文化への過渡期の特徴として考えられよう。沈線文文化は、東北地方で日計式押型文が流行していた時期に関東地方で「三戸式」といわれる土器が流行していた。特に大新町a式など日計式押型文末期の頃には東北地方南部（盛岡付近）まで影響は広がり、大新町遺跡・風林遺跡のように押型文と沈線文が併用される時期を迎える。なお、沈線文による幾何学文様は日計式・大新町式押型文の原体文様に似ているため、あたかもそれらの文様から発達したように見えるが、格子目文を線とする表現手法の原形を日計式・大新町式押型文から見出すのは難しい。沈線による文様表現は別の文化圏から浸透してきたものだろう。

では、押型文はいつまで使用されたのだろうか。第34図の土器は横線V字状文を施したのち、表面を浅いナデ調整で文様を磨り消す。そして改めて



第35図 押型文が磨り消された土器
大新町遺跡 大新町b式 当館蔵

沈線によるV字状の文様を描いている。文様効果としてはどちらでも良い気がするが、作者の意思を反映させる描線手法で加飾したかったのだろうか。地文が無文や縄文など意匠がない無機質なものであれば、沈線による文様は見た目の効果があるだろう。第34図のように幾何学文+幾何学文では条線が複雑に絡み合い文様効果が失われる。押型文が衰退するのは、意匠による器面装飾が流行した結果なのかもしれない。



第34図 横線V字状文上にV字の沈線文を重ねて描く土器
大新町遺跡 大新町a式 当館蔵

左の土器は、3条1組の带状平行沈線による幾何学文が描かれる土器で、縦区画を示す条が正面左端にあることからパネル状の区画を持つ土器と思われる。同様の文様と区画は第38図の土器にも見られることから大新町b式段階の土器なのであろう。囲みの部分に押型文（横位平行線状文）の条線が残り、周囲には器面をナデ調整（→）した痕跡がある。このことは押型文が主文様から地文または器面を平坦に調整するための手段に変化したことを推察させる。押型文は文様表現の役割から器面調整用に使途が移り、沈線文が主流となる時期には文様としての役割は終えたものと考えられる。

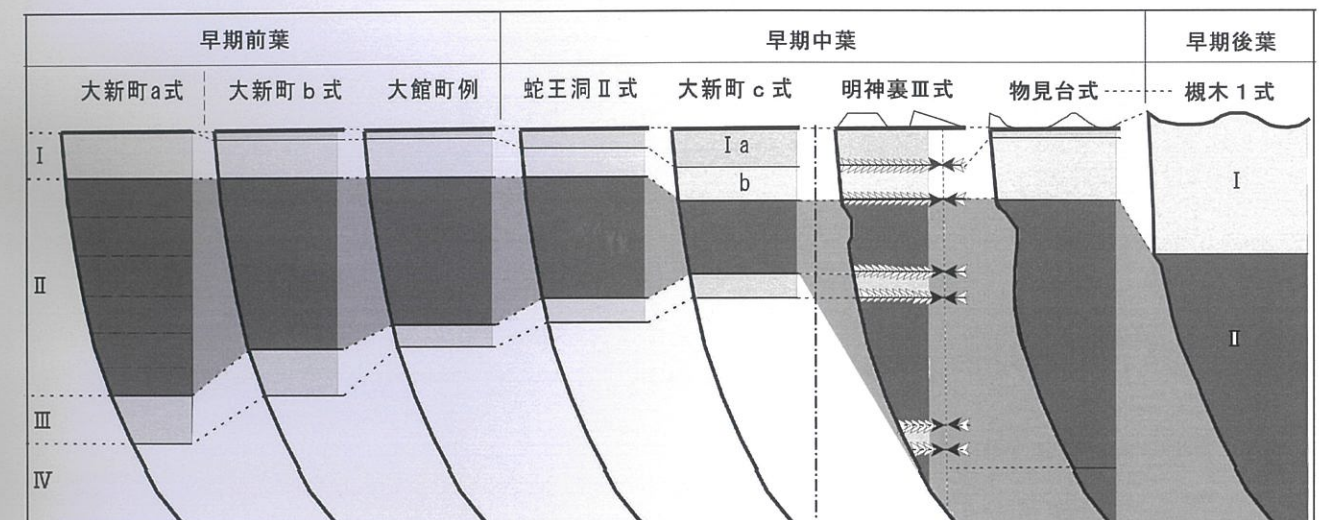
※→は器面調整の方向

2 幾何学文様の発展…幾何学文様の系譜

押型文が衰退し、新たに手書きの線による描線手法が主流になると直線を組み合わせた幾何学状の文様が土器に描かれるようになる。押型文は文様原体となる棒状施文具の長さ・太さで文様効果が限定的で、Ⅱ～Ⅳまで同じ文様が繰り返し段を違えて施される。

沈線文土器になると意匠を描く面に位置の規格性が明確に見られるようになる（文様帯）。文様帯は大きくⅠ帯—口縁部、Ⅱ帯—胴部、Ⅲ帯—胴部下半～底部、Ⅳ帯—底部に分割される傾向が強

くなる。Ⅰ・Ⅲ帯は主要な文様が描かれるⅡ帯を区切る区画を意識した文様が施され、特にⅠa帯とした口唇部付近の文様は、早期中葉以降になると装飾を意識した文様帯になる。Ⅱ帯はⅠ・Ⅲ帯より広いキャンパスが確保され、沈線による幾何学文や斜格子目文など主要な文様が施される。Ⅳ帯は無文部となるものが多い。早期中葉～後葉になるとⅠ帯など主要文様を土器上部に集約させるようになり、早期後葉の槻木1式ではⅠ帯のみに文様を施すようになる。

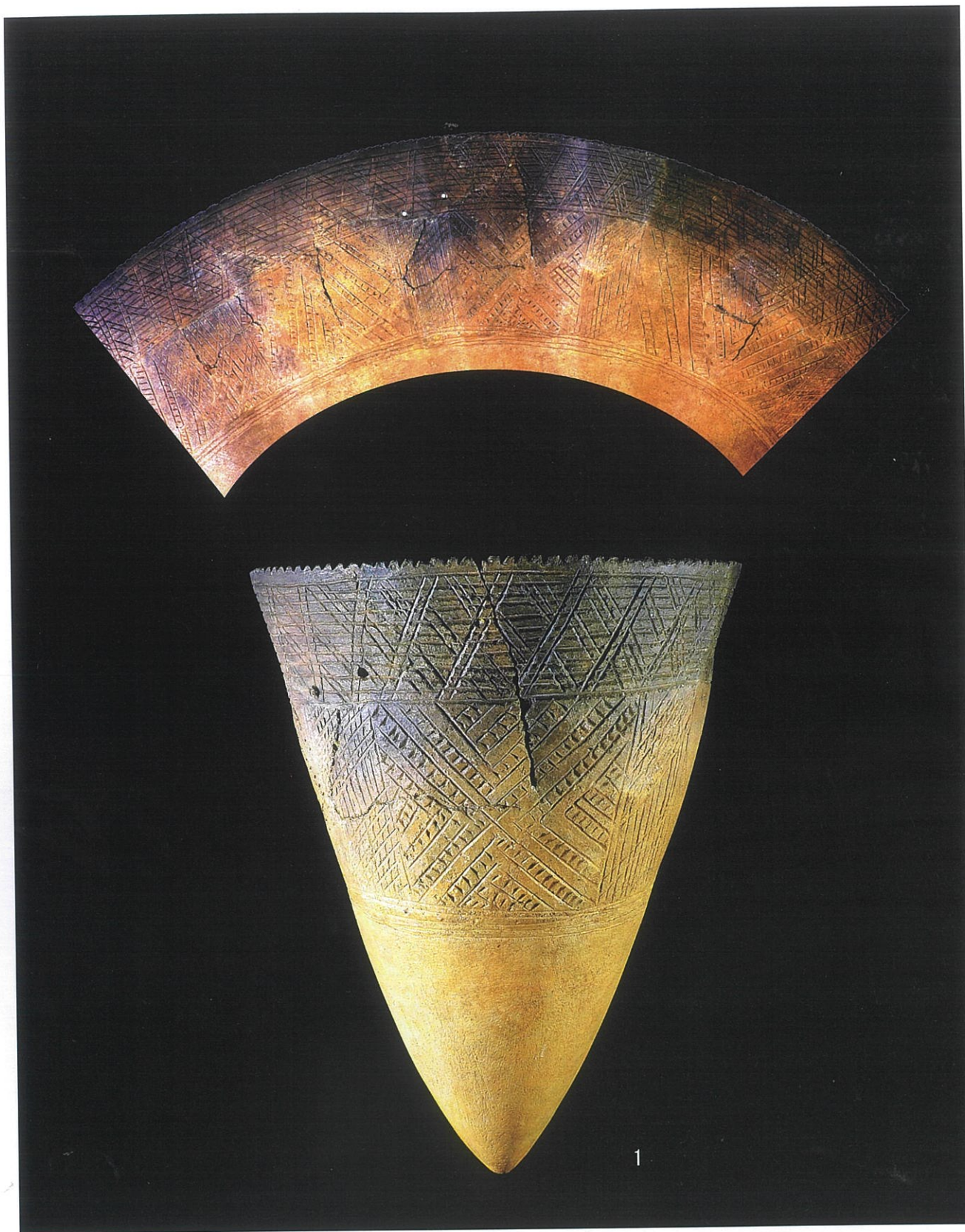


第36図 早期前葉から後葉の土器文様帯

带状平行沈線	带状格子目文			带状格子目文・貝殻文併用
早期前葉～中葉	早期前葉		早期前葉～中葉	早期中葉
	正格子目		斜格子目	貝殻文

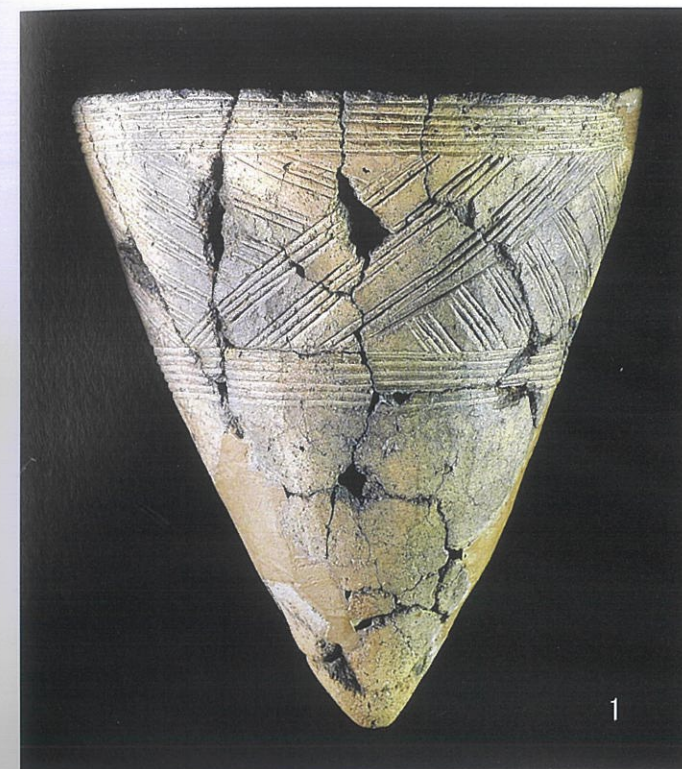
第37図 幾何学状沈線文（带状平行沈線・带状格子目文）

※「带状格子目文」の名称は西川博孝氏の論考「三戸式の研究—千葉県舟塚原古墳封土出土土器を中心として—」1980、「带状平行沈線文」の名称は領塚正浩氏の論考「三戸式土器の再検討」1987を参考・引用した。



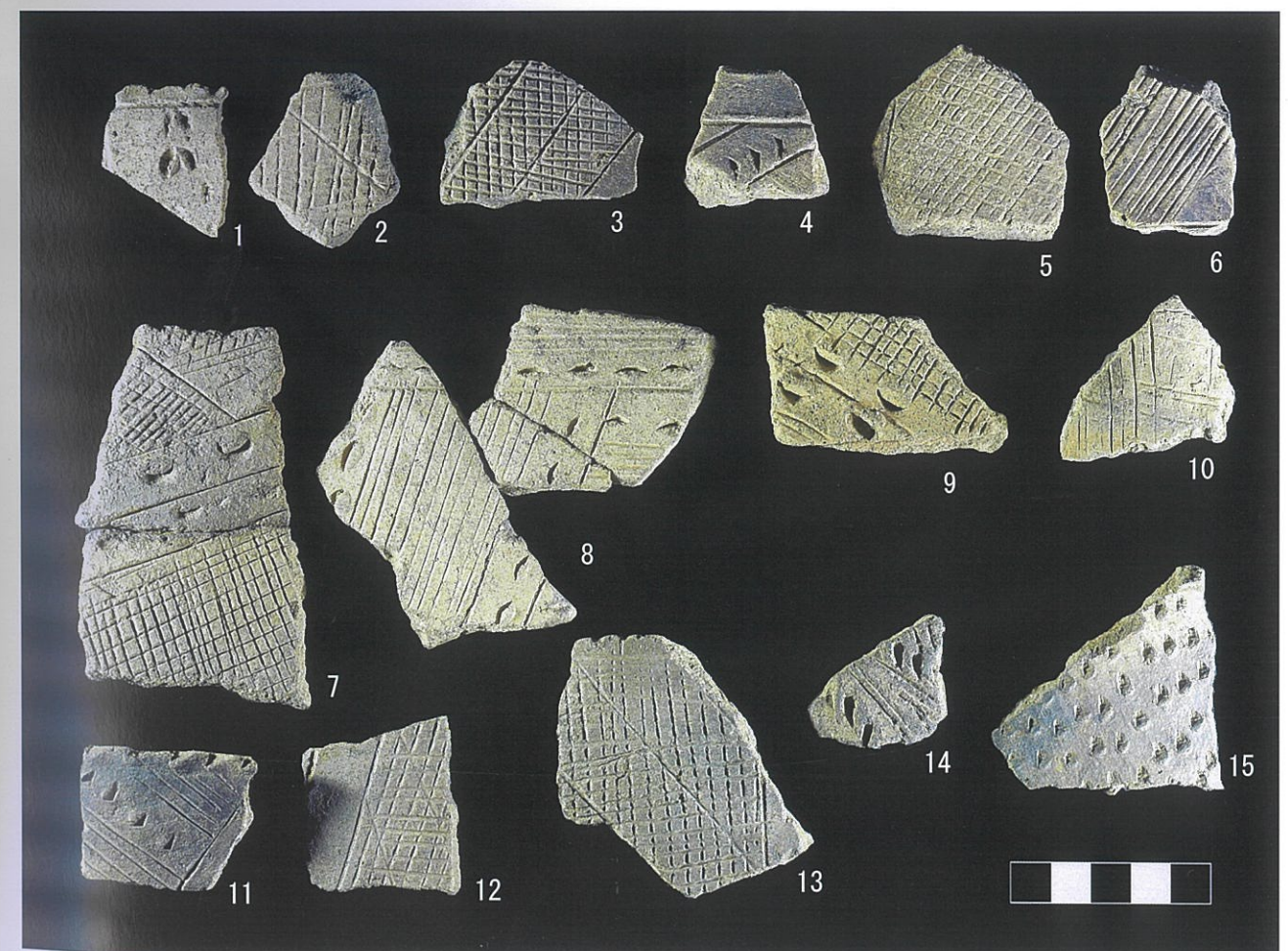
第38図 沈線文土器
大新町遺跡 大新町b式 当館蔵

上の土器は、口縁部にy字状の幾何学文を沈線で描き（Ⅰ帯）、中央部（Ⅱ帯）に短い沈線を充填した帯状平行沈線による幾何学文を描いた土器である。Ⅱ帯は縦方向の沈線で3分割され、各区画でX字状・山形状・V字状と異なる文様を描いている。このような土器は関東地方では三戸式といわれる。



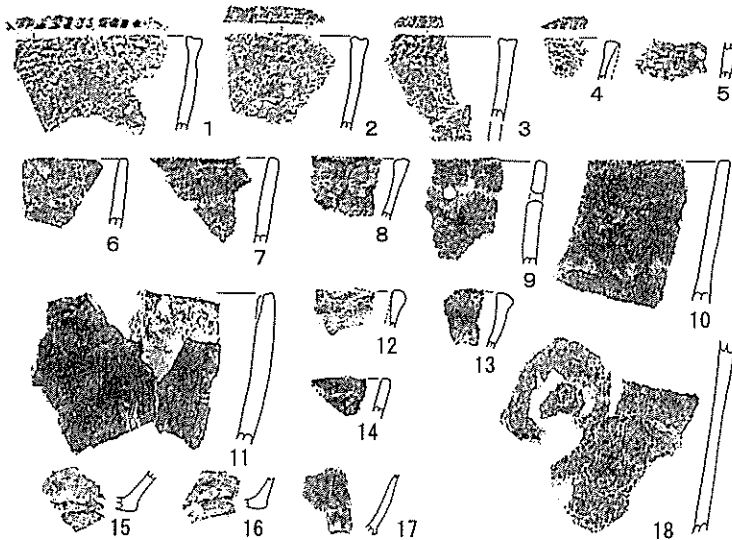
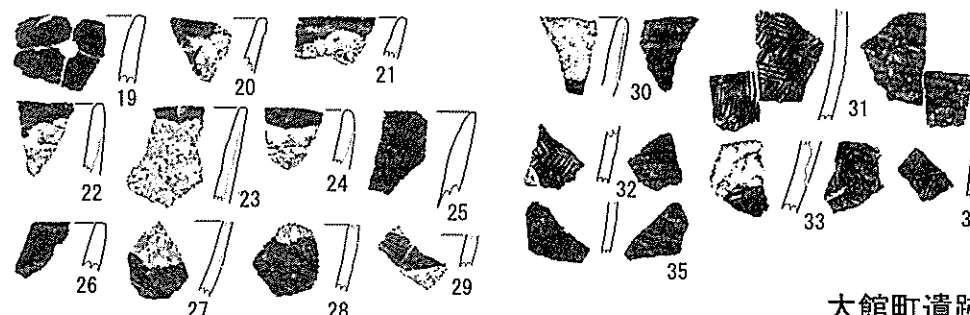
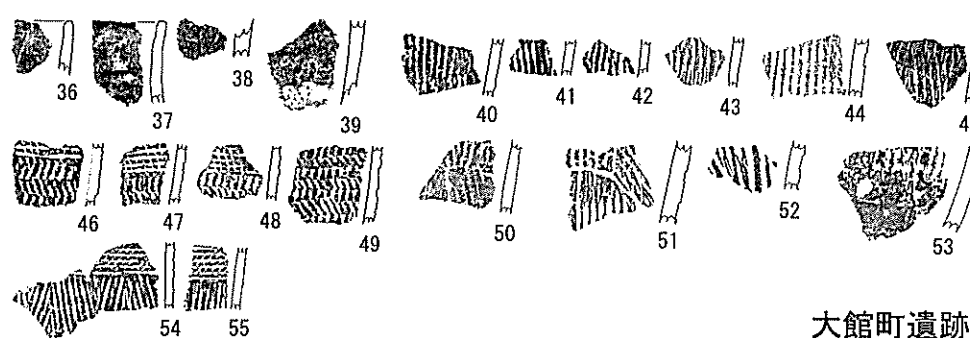
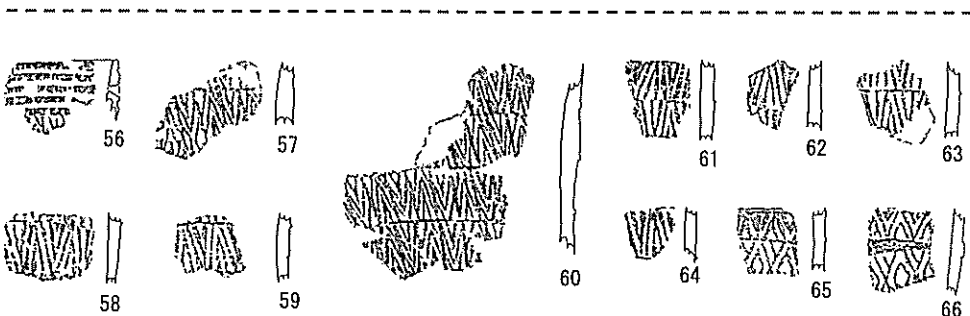
第39図 沈線文土器
大新町遺跡 大新町b式 当館蔵

早期前葉の沈線文土器であるが、押型文も併用されていた大新町a式土器と比べると器形が砲弾状（第24～26図）から第38・39図のように口縁部から尖底部まで直線的で、口縁部が大きく開く円錐形に変わる。文様も胴部上半に集約され、無文部分と明確な境界が引かれる。大新町b式とする土器文様は、帯状平行沈線・帯状格子目文で幾何学文が構成される。しかし、大新町遺跡に隣接する大館町遺跡からは幾何学文を構成する沈線の間にできる無文部分に爪形状の刺突文を施す土器が発見されている（第40図）。刺突文の反対側は粘土が盛り上り、立体感のある文様になっている。同じような盛り上りのある刺突文は沈線文土器に後続する貝殻沈線文土器でも数多く確認できる。沈線文土器に特徴的な文様は土器づくりの「流儀」として継承されたのだろう。



第40図 沈線文土器
大館町遺跡（大平式）当館蔵

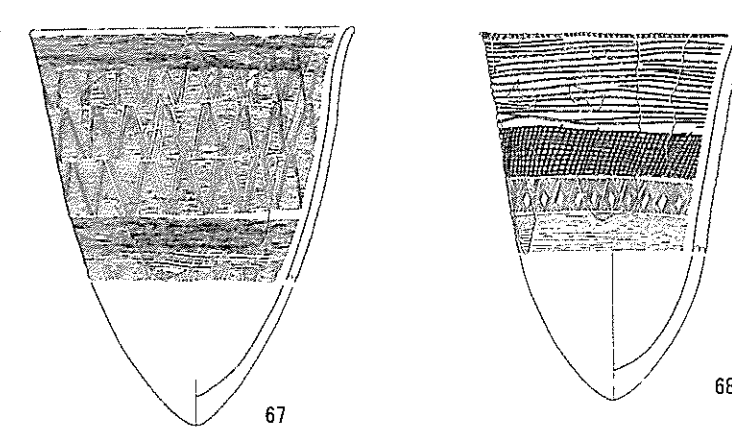
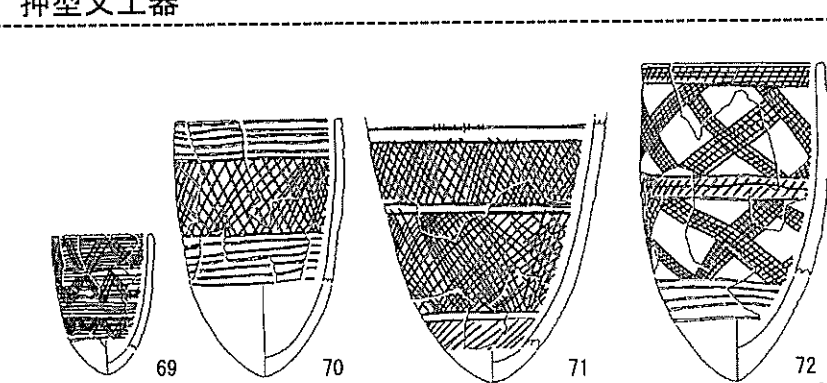
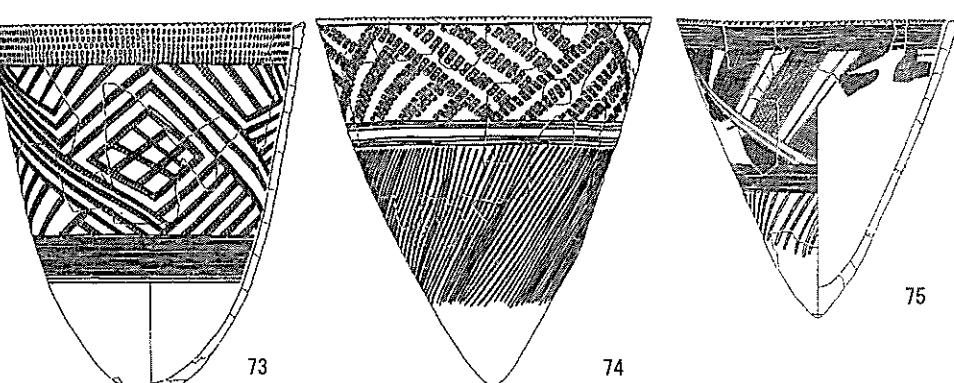
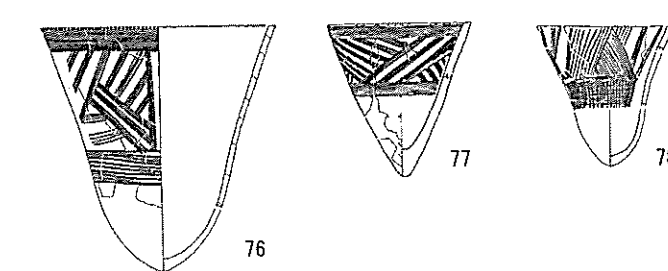
北上川上流域の縄文時代早期土器変遷 (1)

1			時代	時期	型 式
			縄文時代	早期初頭～前葉	竜泉洞新洞式～日計式
時期	大別	細別	主要土器		
早期初頭	無文土器群	竜泉洞新洞式			
		(厚手無文土器)			
早期前葉前半	押型文土器群 1	日計式			
					

第1表

(縮尺不同)

北上川上流域の縄文時代早期土器変遷 (2)

2			時代	時期	型 式
			縄文時代	早期前葉前半～後半	大新町 a 式～b 式
時期	大別	細別	主要土器		
早期前葉前半	押型文土器群 2	大新町 a 式			
					
早期前葉後半	沈線文土器群 1	大新町 b 式			
					

第2表

(縮尺不同)